高校阿倍野新聞

発行所
大阪市阿倍野区阪南
町一丁目30番34号
大阪府立阿倍野高校
新聞部
編集責任者　大森伸樹
発行責任者　木本敬已

Observe！

問題多き大阪

足下はH・Rにあり

文化祭統一テーマ

文化祭の統一テーマと、どうしたら〝素晴らしい文化祭〟ができるかということについて、六月十四日文化部長の楠井君と対談したその結果、H・Rの時間をまず十分に使えることが、第一条件ではないかという結論に達した。

まず、〝統一テーマ（メインテーマ＝汝の足下を掘れ、されば泉湧かん・サブテーマ＝大阪）について〟という議題から入っていった。

この統一テーマには二つの意義がある。

一つは、日頃からの文化祭の活動に、どんなものをとり入れたらいいのかという悩みを解消するためにということ。もう一つは、文化祭にバラバラのものではなく、統一されたある方向性をもたせるということである。このうち文化部会は後者の方を特に推し進めている様であるが、それには賛成者も多い。しかし、サブテーマの〝大阪〟が、大きな波乱を呼んでいるのである。文化部会では、メインテーマを具体化するものとして、サブテーマがあるといっているが、実際には地理的範囲を縮めただけにとどまっているのではないだろうか。と新聞部では考えている。

確かに〝大阪〟というテーマの範囲は広いが、どうしてもその〝大阪〟という地理的な規制にしか思われないという人が多く、いわば堅苦しいものになりはしないか、全く関心のないものになりはしないかという不安が大いにある。

「しかし、どうにかして文化祭への方向を定めて、根底に何か共通のものを敷き共通のものを作ろうとしている。」という文化部会の言葉も理解してもらいたい。

しかし、サブテーマだからといって、とり入れなければならないかどうかという問題に対しては、あまりはっきりとした返答は得られず、できる限りとり入れてほしいということだった。そういうサブテーマなら各クラブ、各クラスで統一テーマにそったサブテーマを考えた方がよいだろう。

また、近年の文化祭は価値がないとか意義がないと言われている。が、それはどういうことから感じるのかとたずねたところ、「これは、文化部会の意見ではなく、文化祭についての全校生徒のアンケートの中にそういう意見がみられ、またOBの人達が文化祭の感想で自分達が、飲食店をした経験があり、そのときは楽しかったけれども、本当に楽しいものではなかったという参考意見からも、うかがえるからである。

では、それを克服するには、どうしたらよいのだろうか?文化部会は『自分たちがやる』という意識や、文化祭への関心のなさに問題があるのではないだろうか。」と述べている。

〝自分たちがやる〟という意識のなさは、日頃からの、クラス一体での活動を通じて、連帯感を高めることによって簡単に克服できるのではあるまいか。

しかし、その日頃からのクラスの活動をするにあたって、放課後、もしくは家でやってくるようなことがあると、大きな反発をみせどうにかして避けようとする。

それなら、どうしたらよいのだろうか。それには、金曜日の四時限目が、いかにしてつぶされないように確保できるかということにあるのではないだろうか。

あるクラスでは、H・Rの時間に予定していた行事が五月上旬から、今まで延期され続けていることからもH・Rの時間が、よく委員会の連絡などで、つぶされていることがわかる。

〝素晴らしい文化祭〟それは、統一テーマなどにこだわるよりも、日頃のH・Rの時間が充分に使えるということが、一番大事なのではないだろうか。

それは、金曜日の四時限目を重要視すべきであるのに、軽視している人が、はるかに上まわっているからだ。まず、文化部会も、我々一人一人も、先生方も充分に、H・Rの時間が、使えるように心がけなければこの問題は解決されないのではないだろうか。

阿倍野の同期の桜

―先生にインタビュー―

現在盛んに、先生と生徒の間には厚い壁があるといわれている。しかし、いつの時代でも、生徒の話題にのぼる先生というものはいるものである。そこで今回は、その中でも特に、中原隆雄先生（数学科）と、稲谷冨夫先生（社会科）のふたりに、インタビューしてみた。授業の中で、これらの先生方と接している人も多いだろうが、それ以外の人も、この記事を通して先生というものを、身近に感じとってほしい。

中原先生の巻

大正四年、八月十五日生

教師という職業に誇りを感じている先生。（教師生活今年でちょうど、四十年目だそうだ）

授業をする時のモットーは——生徒がよくわかるような内容の、授業にしていきたい。

阿倍高の生徒の印象は——おとなしい。もう少しファイトがあってもいいのでは……

印象に残る生徒とは——授業中熱心で、活動的で、明るい子。

いやな生徒とは——いません。

夏休み、冬休みを、どのように過ごしていますか——ほとんど読書。（これは趣味だそうだ）太平洋戦争史のものが主。

最後に、テスト勉強の秘訣は——毎日の積み重ねが大切。皆、頑張るように！とのことだった。

稲谷先生の巻

大正四年、五月十五日生

教師という職業を、どう考えているか——重要だがむずかしいと思う。

授業をする時のモットーは——生徒の能力をひき延ばし、地理は面白いということを、わからせる。

阿倍高の生徒の印象は——皆、紳士的。

印象に残る生徒とは——生真面目な子。

夏休み、冬休みを、どのように過ごしていますか——実地検分が多い。

最後に、テスト勉強の秘訣は——平生の勉強をきっちりと。参考書の類題は大切だから、よく研究するように。ということだった。

期待かける今年の聖火

まず最初に、今年入学したばかりの一年生のために『聖火』について少し説明しておこう。

『聖火』とは、毎年一回聖火編集委員会により編集され、自治会が発行する機関誌のことである。寄稿の資格は原則として本校生徒職員、父兄及び卒業生に限られる。（生徒手帳23頁参照）日頃、あまり表面化されない阿倍高生ら一人一人の意見や主張を自由に発表できる場でもある。

昨年度の卒業式に発行された『聖火№28』については、いろいろな問題があったようだ。

まず、前回初めての試みであった全員投稿についてのことだが、編集委員会としては〝聖火を全校生徒に認識させる〟という目的のもとで行った。しかし、それは言わば半強制的なもので、反対者も少なくはなかった。そんな状態のまま『聖火』が発行された結果、全員投稿は完全には成立せずに終わった。

次に、予算が二十五万円という多額な金額であったにもかかわらず、三万円もの赤字を出した、ということに関しては、生徒側から不満の声が聞かれた。赤字が出た、その根本的理由は委員会結成の時期が随分遅れたために綿密な計画がたてられなかった、ということもあるが、本当は全員投稿という目新しい政策をとったためだといわれる。

しかし、だからといって全員投稿を全面的に不定することはできない。この政策のおかげで『聖火』はある程度、阿倍高生らに密着することができたのだから。

その予算については、自治会から出された原案が議会で承認を得て、すでに三十万円と決定した。

『聖火』編集の中心である委員会がさいさき良いスタートをきり、安定した基盤を築き上げていくことが、現在の段階での、最も重要なことであるように思われる。

部説

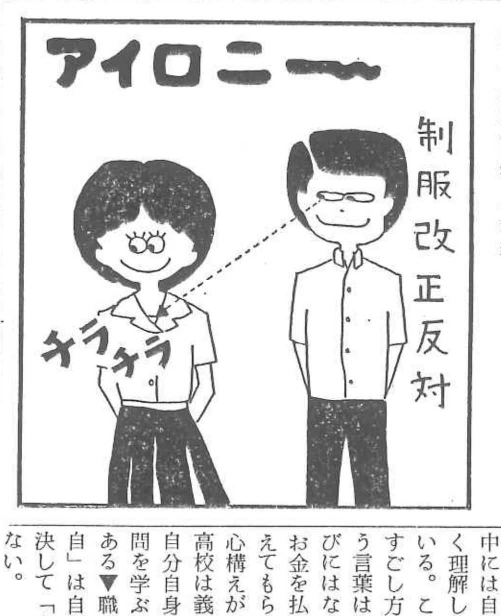
男女間の友情とは

「友情それは、……」というのは過去において、この紙面上又はマス・コミによって幾度となく表現され、定義づけられてきた。しかし、ここであえて、〝男女間の友情は成り立つか〟について考えていこう。

まず、「異性同士の友情について」に入る前に男同士の友情と女同士の友情、果たしてこの両者に相違はあるか、ということについて考えてみよう。この問題を扱うことにより、男同士が感じ合う友情、女同士が感じ合う友情とはどんなものかを定義づけすれば、後の話の発展につながると思ったからだ。

一般的には、男同士の友情は堅く、女同士の友情はもろいといわれている。男の場合、たいていは、慣れてくると相手に遠慮した態度はとらないしかし、その中でも思いやりの気持ちを忘れないつまり、男には屈託がない。（もちろん性格的な違いはあるが）女の場合信頼できる友が、側にいてくれるだけでもいいという、繊細な感情を持っている。だから、つまらない事にこだわりを見せ結局、女の場合、友情関係がつぶれることは少なくはないだろう。この事はある程度、男女の根本的な性格の違いから、否定できないはずだ。しかし、形態の違いがあるだけで、友情を感じ合うのにはそれほど相違はあるまい。

ここで、話を少し戻したい。男と女の友情の定義は、それぞれ違うのに果たしてこの両者に友情関係は成り立つか、ということである。男と女の間には、別の感情、つまり愛情がある。成り立たないという人の意見としては、ある人に信頼や思いやりの心が表われたら同性の場合は親友、異性の場合は気がつかなくても、それは愛であると主張する。逆に成り立つ方としてはそこまで深く考えず、それでもその人に友情を感じていると主張する。ここでお互いの主張は、対立し、くい違う。いくら理論づめで話し合っても結論は出ないだろう。しかし、成り立つという人が現にいるのだから、成り立つと言ってもいいであろう。だが両者の友情に対する定義の意味のとらえ方が違う限り、成り立ち難いと言うのも確かである。しかし、同性に限らず、異性に対しても、理解と思いやりの心を持って接すれば、お互いの友情成立の摩擦を小さくできるだろう。青春時代に同性、異性にこだわらず、友達として広くつき合っていくことは、自分の人格を養うに、一番良いことではないだろうか。


アイロニー〜
制服改正反対
チラチラ

針の穴

職員室前の黒板に「自」の文字が現われると、職員室前は歓声の渦と化す。まったく自分のクラスに「自」の文字があると非常に嬉しいものである▼しかし、自習があって喜ぶと言うことは少し変ではないだろうか。つまり、親の働いたお金の中から税金を取られ、その上に授業料を払って授業を受けているのだから、自習があればお金を損していることになる。それで喜ぶのであるから変なものだ▼高校受験を経て勉強するために入学したのではないのか。だから、授業はもっと真剣に受けるのが当然である。しかし、実際はチャイムが鳴ってからあわてて教室に飛び込み、授業の途中でも終了のチャイムが鳴るとさっさと教科書やノートをかたづけてしまう。先生に対して失礼千万であるましてや親が可哀想である我が子のために働いて、その子はと言えば授業が嫌い。また、やる気がないときてる▼勉強が楽しい人はあまりいない。ほとんどみんな苦しいのである。特に嫌いな教科はことさらである。そして、それが自習であれば、そこは人間、とても弱い者であるからつい喜んでしまう。しかし、その時間自習で遊べても、いつかそのしわよせが来るのである中には自習と言うものをよく理解して勉強に励む者もいる。これが当然行われるすごし方である。自習と言う言葉はどう解釈しても遊びにはならないのだ▼同じお金を払うなら、もっと教えてもらいたいと言う様な心構えがほしいものである高校は義務教育ではない。自分自身で、より高度な学問を学ぶために選んだ道である▼職員室前の黒板の「自」は自習と言う意味だ。決して「自遊」の時間ではない。

再検討この三ヵ月

一学期も、終りに近づき夏休みを楽しみにしている人も多いだろう。さて、この一学期間、どんな行事があっただろう。改正の声が多かったのにもかかわらず、大きな動きが見られなかった女子制服問題、男女混合が功を奏したクラスマッチ、中止になり「もう一度！」との声が高かったが結局、再開されなかった遠足などが、心に深く残っていることだろう。新聞部では、この三つの行事について、とりあげてみた。

女子制服問題

女子制服問題については四月三十日の新聞に特集として掲載された。その時、女生徒に、無作為にインタビューを行なったところ「現状に反対である」という意見が圧倒的に多く、全体の約九十七%を占めた。そしてその希望としては「型を改正してほしい」「男子のように白なら良いとしてほしい」「自由化してほしい」などであった。なぜ現行の夏服がいやなのかという質問に対しては「いやらしい人が上からのぞくから」とか「手を上げれば見えてしまうから」といった女子の気になることが多かった。

このような不満が多かったのにもかかわらず、その後、先生方や一般生徒の間では、目立った動きは何一つ見られなかった。そこで我が新聞部で、もう一度この問題をとりあげようとしたところ、六月十日のPTA総会の後の学級懇談会で二年のいくつかのクラスで先生から話が出され、父兄からも制服に対する不満が出てきたようだ。

そこで、二年の学年主任の福田先生に尋ねたところその不満というのは、先日発行した新聞に掲載されているインタビューの内容とほとんど同じであった。そこで、二年の先生方の間で会議をした結果、制服の基本的な型を改正するということではなく「袖口をせばめる」とか「襟を詰める」などということで、一応の解決をみた。

しかし、早急に業者と話がつくわけではない。それに、これは二年の先生方の間で話がされただけであって、学校全体としては、少しずつではあるが動きがみられるようになった。今のところは、ひとりひとりが制服の袖や襟を詰めるなど工夫するしかないようだ。とおっしゃられていた。

また、風紀部会では「男子は白なら良いとされているのに、なぜ女子だけブラウスを規定するのか」ということを問題として取り上げている。それに加えて、女子のブラウスは丈が短かく、動いていると、スカートから出てきてしまう等、実用的でないことや、わざわざ買わなければならないので、経済的に負担がかかる、などを理由に、女子も男子のように「白なら良い」としてもらいたいと、先生方に訴えている。

しかし、いくら風紀部会が制服改正を唱えても、女生徒たちが、それほどまでにこの問題を考えているかは、はっきりわからない。

その為部会では、制服に対するアンケートを行ない、部会の動きを広くみんなに知ってもらおうと、六月二十八日に部報も出した。

我が新聞部では、先日の新聞に掲載したように、女子の制服が実用的でなく、インタビューによって出てきた「いやらしい人が上からのぞく」とか「手を上げれば見えてしまう」という問題があるなら、そのような問題がなくなるように、女子制服の型の改正を、してもらいたいと願っている

女生徒のみなさん！現行の夏服に不満があるなら、黙っているのではなく、風紀部会の動きを知り、先生方に訴えていこうではありませんか！

遠足

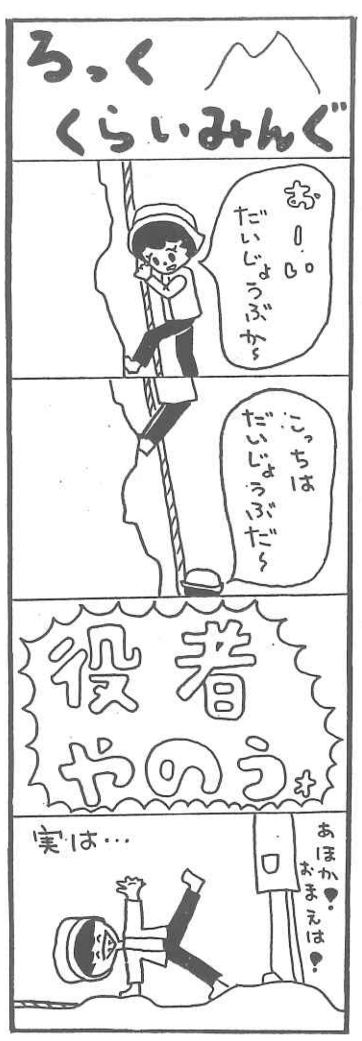
四月二十八日に予定され五月二日に順延となった遠足は、今年も雨の為中止となった。一年生にとっては初めてであり、三年生にも高校生活最後の遠足。また二年生にしても全ての計画を自分達で立てていただけに、そのショックは大きかったであろう。

そこで、我が新聞部では前号で〝遠足復活〟を提起したのだが、それについて生徒側はいっこうに変化をみせていないようである。一部のクラスでは自分達だけの遠足を計画しているようだが、全体としての遠足復活の声が聞かれないのは大変残念なことだ。本当にクラスの親睦を考え遠足に行きたいのなら、他人任せ学校任せというのではなく自分達からはたらきかけなければならないのだ。このままでは遠足復活は実るはずはない。そのためにも少しでも遠足復活の声が聞かれることを望みたいものだ

クラスマッチ

五月七日に行われたクラスマッチにおいてアンケートの結果、クラスの親睦が深まった、男女混合の為男女の仲が良くなった等、多数の賛成意見を集めた。しかし、補欠だと時間の無駄等の理由で少数の反対意見もあり、またいくつかの問題点もあった。その一つは〝勝ちたい〟という意識の為に、スポーツの不得手な者がメンバーからはずされるというクラスがあったことである。これでは「全員参加で、クラスの親睦を深める」という運動部会の基本方針からはずれているというのだ。まさしく、これでは規則違反である。〝応援も参加のうち〟といえるかもしれない。しかし、それでスポーツから得られる仲間意識を全員が持つことができるだろうか？

このような問題は毎回起こり、毎度とりあげられているのにもかかわらず、また同じことを繰り返したのである。次回こそは是非、充分に検討された、全員が楽しめるクラスマッチにしたいものである。


ろっく くらいみんぐ
おーい。だいじょうぶか～
こっちはだいじょうぶだ～
役者やのう
実は…
あほか！おまえは！

条件付きクラブ

—必修クラブ英研—

六月九日の六時限目に希望調査をした必修クラブのことだがその中の一つに英語研究というクラブがあった。

しかしこのクラブに入るには、幾つかの条件が連記されてあった。第一に一年生であること、第二に春休み宿題テストで、英語の点が七十点以上の者、第三にクラブに入るためには、当然重要なことだが、英語に研究心を持っている者である。しかし、これらの条件の第一と第二に新聞部としては、矛盾があるように思えた。

だが、これには、理由があり、小西先生に聞くと、一年生だけにしたことについては、程度を合わすためである。「英語は、積み重ねによって伸びるものだから、一年と二年また、二年と三年との実力の差は激しい。ゆえに、一年生に程度をあわせた。」とおっしゃった。また、小西先生はこうともおっしゃった。「初めは僕一人で、英研の担任をしようと思っていたが薮田先生もいっしょにやらせて下さいということで薮田先生にも手伝ってもらった訳で、初めっから二人なら、一年、二年共に教えることができたのだが…」と。また、春休み宿題テストの点が、七十点以上であることについては、「同じ一年生の中でも、実力には上下があり、八十点を得た者と、四十点を得た者が英研に入ると四十点を得た者が、八十点得た者についていけるか、もしづいていけなかったら、この一年間はおもしろみのないクラブになってしまう。また、必修クラブは、放課後のクラブと違い、退部ができないということが、重要なことである。」と、おっしゃった。

ゆえに、今回の英研の条件付きクラブは、先生の必修クラブが退部はできないという心配から、出てきたものらしい。

こういうわけで、この必修クラブの条件に関しては、認めざるを得ないのではなかろうか。

エッセイ

「ピッチャー交代！」とキャプテンの大声がかかり私はピッチャーマウンドへ点差は四点。といっても、情けないことに、私のチームはもののみごとに負けているのである。このようなことから察して、私のピッチングにすべてがかかっているのがおわかりであろう小学五年のソフトボール大会。本来なら最初からピッチャーとして出場するはずであったが、絶句するほどの不安にかられ、試合当日になって、ナインに守備位置を代えてもらうように頼み込んだのだ。そうなった真相とはこうである。

私はその前日、テレビでプロ野球を観戦した。「巨人対阪神戦」である。私はどちらのチームのファンでもない。それをここではっきりさせておきたい。この試合の様子はというと、巨人のピッチャー堀内が阪神の各選手にメッタ打ちされていたのだ。私は、これが自分の明日の姿ではないだろうかと恐怖におののいたのである。どんなに投げても打たれてしまう。ナインのみんなは励ましてくれるが、ピッチャーは孤独なのだ。そこで私は、守備位置の中で、唯一の攻撃者であるピッチャーをおりて、サードを守ることに決めたのである。

ところが、私に代わって登板したピッチャーは、初回から相手チームの打線につかまってしまい結局私は、ピッチャーという位置につかねばならないはめとなったのだった。しかし、この危機に私は、どういうわけか、自分でも気持ち悪いほどの冷静さを保っていた。「ええい！ここまで来たら死にもの狂いでやるだけだ！」と精魂こめて投げた一球目がストライク。不思議と二球目もストライク。あっという間に三者凡退。自信というものは何につけても最大の武器である。人間、自信をつけると、下手な者でも達人になってしまうことがあるものだ。私がそのいい例であるそれで、自信をつけた私は次の回でヒットを打ち出しそれが我がナインの反撃への導火線となり、一気に逆点。みごとに勝利をおさめたのである。

その後、中学では、数回しか野球をしなかったが、私の胸の奥に潜んでいる野球熱は冷めてはいない。高校生となった今でも、毎日バットを振り回していたいと思うくらいだ。私にとってあの頃は、野球が最高におもしろい時代だった。すべてを野球にぶつけていたそう、自分のすべてを……

私にとって、このソフトボール大会での思い出は、小学生時代、いや、今までを通して最高の感激を覚えた出来事である。なぜならば、私のすべてをぶつけることができたからだ。なにもかも忘れて野球に必死になった私。

この経験を通して、私は熱中できることのすばらしさを知った。そして、その精神は今、私のどこかで芽を吹いていると思うのだ。この高校生活の中。また、私の将来の生活の中にも。

他校訪問

教大附天王寺

今回は天王寺区大道にある、大阪教育大学附属高校天王寺校舎を訪ねてみた。

この取材を通して我々は、この学校が阿倍高と同じく緑に恵まれた学校であった事と、一般の人が想像するようなエリート校ではない事がわかった。生徒達はいきいきとし、活発で充実した生活を送っているようだ。この学校の最大の特徴は、全体的に自由であることだ。しかし、服装は制服制度で生徒達は皆守っている。つまり服装以外のことは自由なので、制服についてまで頭が回らないと皆口をそろえて言っていた。また、教室にはタレントのポスターが氾濫していたし、おもしろい先生もいて、五十分間の授業のうち四十分間は雑談をするという。教師側はテストの監視をつけないなど、生徒を大いに信頼して、生徒との間に

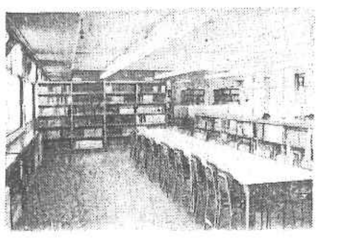
信頼ある師弟関係

融和を図ろうとしているつまり、人間関係を重視しているわけだ。

自治会の活動も活発で阿倍高のように執行部と自治会部会が分かれている二権分立を行い、執行部と自治会部会がH・Rと直結している。とりわけ〝有志〟という名で学級委員会と結びついている自治会行政機関に積極的に参加できる権利を生徒一人一人が持っているのには目をみはった。また、各委員会には投書箱があり、これによって生徒の意見が最大限尊重される。さらに、自治会発行の文集も多く、地歴クラブの季刊『地歴』や図書委員会の『歳星』など生徒に多方面にわたる情報を提供している。それからクラブ活動だが、クラブ数は阿倍高の約半分中にはカヌー部という風変わりなクラブや『劇団軟派船同好会』というものもある。生徒達は各自の個性を伸ばし合っているが、予算の少ないのがわが校と同じく自治会の苦しいところだそうだ。

最後に「わが校をどう思うか」という質問に対して、〝おとなしい学校だ〟と言っていた。この学校は他校にあまり興味がなく、独立した理想の学園という感じがした。

我々はこの取材で阿倍高生にはまだまだキリリとしたところが欠けているように思えた。もっと頑張らなくてはと痛感した一日だった。


図書館

編集後記

今回の新聞、いかがでしたでしょうか。ガリ版の新聞もいいけれど活版もいいでしょう。新聞部は、皆さんに、よりよい新聞をお送りするために、初めてガリ版班と活版班とに別れて新聞を発行しました。

ところで、やっと六月も終りましたね。なにしろ六月という月は、梅雨でじめじめしてくるところへもってきて衣替があったり、水泳の授業が始まったり、それにこの月は、祝日が一日もないんですよ。まいっちゃった。もっとも、その分夏休みがあるからいいでしょう。と、呑気にいってられません。いやあな期末考査が待ってます。中間考査の良かった人も悪かった人もがんばりましょうね。

六月の悪口ばかり書いてましたが、ジューンブライトとか何とかいって、六月は結婚の月だそうでしてそういえば、パンダさんも無事御成婚とか。いいですなあ、ぼくなんか、パンダさんにあやかりたいものですよ。「うたた寝に恋しき人を見てしより夢てふ物を頼みそめてき」とは、さすが小野小町さん。だけど皆さん、うたた寝をしても、風邪をひかないようにね。